

第 39 回大会 セッション「ヒュームとスミス（スコットランド啓蒙思想研究）」事後報告

報告 坂本達哉（慶應義塾大学）

森岡邦泰（大阪商業大学）

世話人 篠原 久（関西学院大学・名誉教授）

合評会：田中秀夫編『野蛮と啓蒙——経済思想史からの接近』

京都大学学術出版会 2014 年 3 月刊（vi+694）

セッション趣旨

デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスを中心とする「スコットランド啓蒙思想」の（継承・影響関係をも含む）「多面的研究」が本セッションの主要テーマであり、これまでの社会思想史学会では、「プーフェンドルフの政治思想」、「ヒュームの政治思想」、「ヒュームの経済思想」、「ジェイムズ・ステュアートとスコットランド」、「アダム・スミスの法学講義」

（A ノートと B ノート）等の報告がなされてきたが、今回は前回の「合評会」形式（対象著作：A. ハーマン『近代を創ったスコットランド』）に引き続き、同形式として上記の近刊書（序章・本文 19 章・終章からなる 19 人による論文集）をとりあげた。

坂本達哉氏による報告（発題）

編者の田中秀夫氏は 2003 年より 2013 年までの 10 年間に 4 回の科研費を利用した共同研究を組織し、その成果はこれまで『共和主義の思想空間』（2006 年）、『啓蒙のエピステーメと経済学の生誕』（2008 年）として刊行されてきたが、上記のものがその最新の成果である。いずれも「所属・分野・世代横断的な継続的共同研究」として、「社会思想史・経済思想史という社会科学の弱小分野」の存在感を主張したものといえる。

「野蛮と啓蒙」という共通テーマの設定は、「ヘーゲル、ニーチェ、マルクス、フランクフルト学派、フーコー、マッキンタイアー、ポスト・モダン等」の問題意識を継承したものであるが、「野蛮」と「啓蒙」の本質については、「論点列举的・羅列的であり、曖昧のまま」に残されており、「啓蒙の産みの苦しみとしての野蛮」と、「啓蒙の鬼子としての野蛮」との区別と関連への究明がみられない。本書の特徴としては、「経済学の形成とその歴史的役割」に焦点を絞った点に見出さう。

本書所収論文（の一部）の諸特徴を、「分析視点」（既視的か新奇か）と「文献・資料の使い方」（普通が新奇か）という面から検討してみた場合、「分析視点」と「文献・資料の使い方」がいずれも新奇なものとしては、第 1 章「バロック期スペインから啓蒙へ——服従と抵抗」（松森奈津子）、第 14 章「ルソー焚書事件とプロテスタント銀行家——焚書と啓蒙」（喜多見洋）、第 15 章「ランゲと近代社会批判——永遠の奴隷制と野蛮」（大津真作）、第 17 章「ペイン的ラディカリズム対バーク、マルサス」（後藤浩子）の四論文を挙げることができ

る。

「野蛮」等の概念をどこまで同時代的文脈において解明できているのかという疑問や、(事実誤認を含む)些細なミスが散見されるが、本書の主題に焦点を合わせようとする各論文の努力は評価しうるといえよう。これからの課題として、「海外の研究との比較」という視点からいえば、「徹底した歴史・資料内在の立場をとる J.G.A. Pocock」、「明確な問題意識を表明している Jonathan Israel」、「現代的問題意識からの見直しを強調する Anthony Pagden」の諸著作にみられる方向を批判的に検討することも必要であろう。

森岡邦泰氏による報告(発題)

報告は四つの視点(野蛮と啓蒙という問題設定 / 啓蒙と反啓蒙 / 手法について / 共同研究について)に分けて行う。

1. 野蛮と啓蒙という問題設定

序説(田中秀夫)を踏まえて各章の執筆者には、「経済学は貧困など『野蛮を廃絶する道を教えるものとして誕生した』ととらえられており、終章(田中秀夫)では、「技術は…古い因習的な生活を近代的な合理的生活に変革するものであった限り、開放的な力であったが、…各地の固有の文化的伝統を破壊するものであった限り、暴力装置にほかならなかった」ゆえに「啓蒙は…野蛮に転化した」とされている。しかし、貧困と野蛮、近代化と啓蒙との同一視は概念の希薄化を生み出すことになる。総じて本書の諸論文は「従来の議論を、野蛮と啓蒙という観点から分類し直した(あるいはそういうラベルを張り直した)印象」が強い。

第1章「バロック期スペインから啓蒙へ」(松森奈津子)、第2章「マリアナの貨幣論」(村井明彦)、第3章「17世紀イングランドのトレイド論争」(伊藤誠一郎)、第4章「重商主義における野蛮と啓蒙」(生越利昭)、第5章「スコットランドの文明化と野蛮」(田中秀夫)、第10章「J・F・ムロンの商業社会論」(米田昇平)、第11章「ムロンとドラマール」(谷田利文)、第12章「モンテスキューと野蛮化する共和国像」(上野大樹)、第13章「テュルゴとスミスにおける未開と文明」(野原慎司)、第14章「ルソー焚書事件とプロテスタント銀行家」(喜多見洋)の諸論文は、それぞれ専門領域の研究としては新たな観点から掘り下げた興味深いものではあるが、本書の野蛮と啓蒙という問題設定とはあまり関連性のないものである。

2. 啓蒙と反啓蒙

第18章「マルサスのペイン批判」(中澤信彦)の冒頭において、パークは「近代の象徴であるはずのフランス革命」を、「文明の野蛮への転落を引き起こした事件」と解したことにより、『啓蒙の弁証法』の先駆けとみなされているが、そもそもパークにとってフランス革命は近代の象徴などではなく、「ならず者が起こした唾棄すべき暴動」に過ぎないのであって、彼自身は「反啓蒙」の陣営に数えられるべきだと思われる。本章主眼のマルサスについても、「生存権を認め、福祉を推進する立場」に反対する「反改革」を鮮明にしているのだ

から、「反啓蒙」といってよい。第 19 章「ドイツ・ロマン主義における啓蒙と野蛮の問題」（原田哲史）のミュラーも、近代化によって破壊されつつあった中世的制度への郷愁の思いを表明しているのもあって、「向いているベクトルの方向」は、改革や啓蒙とは正反対だと思われる。

3. 方法について

「野蛮」については、(1) 原文で「野蛮」という言葉が使われている箇所を精査して、当該思想家の概念を明らかにしている章と、(2) 文明化の負の遺産を指して、これを野蛮と呼んでいる章がある。前者の手法は、思想史の研究方法としては堅実なものであろう。後者の方法は、成功すれば前者より大きな視野を開拓する可能性を秘めているが、既存の議論のラベルの付け替えになりかねない危険性がある。そうなった場合は、いたずらに概念の拡張を要求して概念が希薄化し、結果的に何も言っていないことになる。『啓蒙の弁証法』のような哲学書であれば、野蛮の概念を導入する妥当性は、その哲学的議論の体系性、精密性、理論構築によって担保されるが、短い思想史研究ではそれは難しい。

4. 共同研究について

人文社会科学は、基本的に各人の問題意識と関心で研究を行う「個人プレー」であるがゆえに、共同研究は「論文集」という結果になりやすく、共同研究を銘打つものが実際には論文集にすぎない現状をみれば、本書は、時代、地域などに配慮している点で、比較的まとまりがあるほうだといえよう。

以上の二つの「発題報告」に対して、数名の執筆者——田中秀夫、生越利昭、渡辺恵一（第 8 章「アダム・スミスの文明社会論」）、中澤信彦、原田哲史——からの応答があり、「啓蒙」、「経験主義」、「野蛮」、「反動」等の概念をめぐる議論がなされ、「啓蒙の弁証法」の意義についての指摘もみられた。

なお、当日の出席者は約 40 名であった。

（文責 篠原 久）